

講評

作文コーパスを資料に児童・生徒の漢字使用・選択傾向と発達の実態を明らかにする

——語彙情報つき作文コーパスの構築と学齢別語彙・漢字使用実態調査——

児童・生徒が作文の中で既習の漢字をどの程度書いているかを実証的に明らかにしようとする研究である。本研究は、作文データの収集に当たって3つの必要条件を設け、作文における語彙使用、漢字使用の実態を調べるための信頼できる資料を収集したこと、その資料を多角的、緻密に分析したこと、中学3年次の漢字使用頻度を基準として学齢別に到達状況を示したことなど、評価すべき点が多い。義務教育9年間の縦断調査ができれば素晴らしい。この研究成果を漢字教育、作文教育にどのように活用していくかが課題であろう。

(名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科 教授 尾崎 明人)

労作である。小中学9年の各学年の児童・生徒の作文データを忠実に電子化し、その語彙調査によって得られた約66万語の語彙データが、漢字別・語彙別に利用可能な形式で公開される。大量のデータであること、統一されたテーマの下に書かれた、他人の手が入っていないデータであることなど、データとしての価値が高い。また、結果の分析に関しても新しい視点からもなされている。まだ改良の余地のあるものも見られるが、このデータを利用する人には刺激となる。今後、語彙・漢字学習システムの構築や学習教材の開発が期待される。

(公益財団法人日本漢字能力検定協会現代語研究室 室長 佐竹 秀雄)

漢字指導において問題になることの一つに、「学習した漢字を文中で書けない」という学習者の状況がある。そこには、語句の意味と漢字の意味とが結び付けられないという問題をはじめ種々の要因が考えられる。本研究で構築された「児童・生徒作文コーパス」は、「漢字テスト」では解明しがたい学習者の生の漢字使用実態を明らかにし、語彙リスト等多くの成果を導いた。今後はこのコーパスをもとに、学習者の実態を反映した有効な漢字学習指導方法を導いていくことができると期待している。

(奈良教育大学教育学部 教授 棚橋 尚子)

本研究は、「漢字習得」ではなく「漢字使用」という実践的でユニークな観点であるという点、「児童・生徒作文コーパス」を構築しての実証的研究であるという点、漢字を語彙と関連づけて分析するという点、などで、極めて意義深いものと思いました。素晴らしい研究だと思います。質問したいと思ったのは、ここでの調査が作文のテーマに影響されるのではないか、語単位でなく形態素レベルでの分析でも結果は同じか、字形ミス、不使用、送り仮名ミス、漢字選択ミス、などのミスの質との違いはどうか、といったことです。調査対象の数(学年の凹凸)と質(附属)ということも議論の対象になるかもしれません。が、本研究の成果がきわめて重要で、示唆的であるということに疑問の余地はありません。心から敬意を表します。

(早稲田大学文学学術院 教授 森山 卓郎)

作文授業を改善する実用的なアイデア教材の開発

——日本語教師・日本語学習者の意識調査をもとに——

本研究では、ピア・レスポンスを取り入れた作文授業（全15回）を受講した学習者にインタビューを行い、その授業について受講者が問題だと認識している点を8項目にまとめている。また、学習者の作文を日本語教師に評価してもらい、進歩が見られたと報告している。さらに、日本語教師125名にアンケート調査を行い、作文教育を行う上での問題点、ピア・レスポンスを実践する上での問題点についても明らかにしている。大変意欲的な研究であるが、報告書の構成や論述の仕方などに改善の余地がある。また、実践した作文授業のより詳細な説明があるとうよかった。（名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科 教授 尾崎 明人）

学習者に対するインタビュー調査と、教師に対する自由記述のアンケート調査によって、それぞれの問題意識を明らかにしている。また、それらの調査結果を踏まえた教材を利用したことによって、学習者の作文評価の向上が見られたという。問題意識に関して、学習者側、教師側のいずれにも、格別目新しい指摘がされているわけではない。しかし、それでもちょっとしたアイデアで指導効果が出たということであろう。本研究の成果をさまざまに生かし、研究がさらに進展することを期待したい。

（公益財団法人日本漢字能力検定協会現代語研究室 室長 佐竹 秀雄）

本報告では、日本語学習者の作文技能を高めるために教師添削に重ねて実施されているピア・レスポンスの手法を実効的なものにすべく、教師や学習者に対する種々の調査が展開された。その一つ一つについて丁寧な検討、分析がなされており、成果の説得力ともあいまって読み応えのある報告となった。ただ、目指す作文の内容の具体や、ピア・レスポンスで醸成するであろう対人的能力と作文成果との関連についてはさらに知りたいと思わせられた。成果に基づいた今後の教材開発には大いに期待したい。（奈良教育大学教育学部 教授 棚橋 尚子）

ピア・レスポンスを取り入れた授業デザインを、日本語教育においていかに構築するかという実践的なアクションリサーチとして拝読しました。アドラー心理学、マインドマップなど、多様な観点からの視野の広い授業論となっている点も注目されます。課題と思ったのは、研究としての一般性です。効果について、対照群がないため判断には微妙なところが残るようにも思いました。内容的にも、例えば、推敲前後の作文で増加が見られたのが「接続詞の使用数」「具体例の引用数」「説明」などとなりましたが、これらはいささか周知的に思いました。しかし、これらは方向をどう見るかにもよることと思います。ピア・レスポンスといっても、教師特性、学習者特性、学習環境などに応じて、取り入れ方は様々だと思えます。大切な研究です。今後のご発展を祈念します。（早稲田大学文学学術院 教授 森山卓郎）

選考委員

尾崎 明人	名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科 教授
佐竹 秀雄	公益財団法人日本漢字能力検定協会現代語研究室 室長
棚橋 尚子	奈良教育大学教育学部 教授
森山 卓郎	早稲田大学文学学術院 教授